



《エロ迷宮をクリアするまで帰れません！》

いば神円(しんえん)

サンプルです。

ヒロイン…シユア♀

茶髪、水色瞳。お姉さん系の美人顔。

土魔法が使える古代文字が読める。薬学にも詳しい。チルキが重めに大好き。国宝よりチルキは価値があるし国宝に、まだ選ばないのは国の怠慢ではと内心思っている。

迷宮での快楽で倫理観が壊れてしまう。

一人称・私

お相手1…チルキ♂

青み鱗、尻尾のある人型竜人、鱗のある大きな身体。ちんは二本。一応、水魔法が使える毒耐性があり肉体が竜人なので、とても強い。シユアを愛している。

念願の番になれたのに迷宮中、寝取られが発生してしまう。

一人称・オレ

お相手2…ライ♂

黒髪、赤瞳。

炎と闇魔法が使える。仲の良すぎる双子。相方を兄弟と呼んだりレフと呼んだり。軽いタッチでよくイチヤイチヤしてる。

元々、貞操概念が低かったがエロ迷宮によって寝取りをしてしまう。心根は悪い奴ではない。

一人称・俺

お相手3…レフ♂

銀髪、緑瞳。

風と光魔法が使える。古代文字は少しでも読める。相方を兄弟と呼んだりライと呼んだり、ライよりは、ちよつとだけ氣を使うけど氣持ち程度。元々、貞操概念が低かったがエロ迷宮によって寝取りをしてしまう。心根は悪い奴ではない。

一人称・僕

エッチな事になっている他のモブ

←
←
←

サマンサ♀

活発な鍵開けの能力が高い女護兵だったがエロ迷宮の謎解きで快楽に翻弄される。

一人称・アタシ

男護兵三人♂

サマンサとは良き相方として組んでいたが今回のエロ迷宮で親密な関係になり無意識に性格が歪んでしまう。

私と竜人のチルキは同じ村出身の幼なじみ兼、家族だ。迷い子となっていたチルキを私の祖父が連れて来て共に育った。

チルキが大きくなると出稼ぎに都会の方へ行くと言うので私も共に旅立ち、この大きな街に来て共に護兵（ごへい）となった。

今回は何度か組んだ事のあるライとレフの双子の兄弟と共に新迷宮に挑む。どうやら、その迷宮は一階以下に行きたいとなると何かの条件が必要らしく今の所、説明がされていない。

正直、一階以下に行けないと、こうして装備して挑んでも、あまり意味が無い気がするし昔ながらの迷宮に挑んだ方が私は良いような気がする。けれど男心を擽るのか解明したい三人が、あーでもない、こーでもないと言って解明に挑む。

同じように心が擽られて挑む同業者は多く、殆どが男性の護兵ばかりだ。別

の女性護兵は私と同じように少し離れた位置から、わちゃわちゃした様子を見守っている。

その筈だった。

「あそこの貸本屋の隣に新しいお茶屋が出来たみたいでさ今回のが終わったらアタシと一緒に行こうよ」

「はい！ ぜひに！」

「おい、サマンサ、ちょっとこっち来て調べてくれるか」

「あーい！ じゃ、シユアちゃん、またね！」

彼女が仲間の護兵に呼ばれたので会話していた私達は手を振り合って離れる。仲間の護兵が何かを見付けたらしい。彼女が、その何かに手を伸ばし一瞬にして彼らが消えた。

「え……え？ うそ、条件が開いた？ え？ え？ え？」

私が戸惑っていれば違う所を見ていたらしいチルキと双子が遅れてやってくる。

「どうかした？」

チルキが私の顔色を見て声をかけ。

「あ、まって彼らいないくない？」

「条件が開いたって事？ シュアさん見てた？」

双子が辺りの空気の違いに気付き言った。

「う、うん……サマンサさん達の組が、あそこらへんで弄つてたら皆が消えて……」

「うーん……流石に二階でボス戦はないよね兄弟」

「どうする兄弟、僕らが開いたのじゃないから情報売るのも微妙だよね。後で喧嘩になる」

ライとレフが相談しながら発動場所を眺めている。

「シュアちゃん、彼ら、此処を触ってた？」

チルキが怪しそうな窪みを見付け触るが何の反応も無い。双子も触つてみる
が首をお互い傾げて悩んでいる。

「折角、二階下に行けるなら行きたいよね……」

私も手を伸ばして試しに押してみると、カチツと音がして空洞が生まれ。

「え？」

思わず何かを掴んだと思えば私達は二階下へと飛ばされたのだった。

「シユアちゃん無事か!？」

「うん、大丈夫……」

手には先程掴んだ不思議な物体を握っているだけで、とくに問題は無い。

「え、その形……」

「わ、本当だ……」

「？」

双子が私の手にしているモノを見て戸惑っている。私は良く分からなくてチ

ルキに見せたが彼も不思議そうな顔をするだけだ。

「一応、何かの鍵になるかもだし持っておくね」

「う、うん……」

「そうだね……」

双子が曖昧な表情で微笑んで頷く。よく分からないけれど、あまり良い印象の道具では無いのかもしれない。

「それにしても、この迷宮は……謎解き系っぽいね兄弟」

「そうだね兄弟」

二人は部屋の前側の四角い空間の上に立ち古代文字を見て悩んでいる。

「『ヨキナカヲシメセ』ってあるね」

私は古代文字の勉強をしていて比較的読めるので後ろから覗き込み言った。

「良き仲を示すの？ 兄弟、僕の胸を貸してやろう」

「兄弟、俺の胸も貸してやろう」

双子がキャッキヤしている。私は振り向いてチルキに腕を広げた。

「私の胸で泣いても良いんだぜ」

ちよつと格好良く言ってみたら、チルキは喉をキュキュキュと鳴らして笑い私を軽く抱きしめてくれた。なので私も抱きしめ返す。

ゴゴゴゴゴ……

私達が乗っていた石畳の地面が開いていく。開ききると階段。なんとアレで正解だったらしい。

「三階下へ行くの楽だね兄弟」

「そうだね兄弟」

「シユアちゃん、手を繋いで行こう」

「手を？」

私を軽く抱きしめた状態だったチルキは言う。

「仲の良さを出してないと扉が閉まるかも」

「なるほどね」

私達の言葉を聞き双子は片腕で肩を組みながら私達は手を繋ぎながら階段を下りたのだった。

三階下にも古代文字。それと絵が描いてある。

「あ、やっぱり鍵だったんだ」

「わ、わあ……」

「……もしかして、この迷宮」

双子が戸惑いの声を出しているが私は『ナカニイレテユビノカズダケウゴカセ』の指示に従う。

ズ……ズコ……ズ……ズコ……

どうやら前後に動かすだけで良いらしい。二十回鍵穴に対して前後に動かすと扉が開いた。鍵を外しても扉は閉まらないらしい。一応、引き続き持つて歩く事にした。

「……それにしても魔獣や魔物と出会わないね」

「うん。謎解き迷宮だからかな……」

チルキと会話をしながら進む。進めば、また絵と古代文字。

「はーん？ この鍵の底をはめて……手で握る？ それで擦れば良いの……？」
不思議な形をした鍵をはめると何やら天井に向かった形になり、それを二十

回手で軽く握って上下させるらしい。革手袋の下でザリザリ音がする。

「あ、開くね。これで四階下に行けるなんて楽だけど……ん？ どうしたの二人とも」

双子が頬を染めて少し前屈みになっていて腹でも痛そうな雰囲気だ。

「え？ まさか呪い？」

「い、いや、大丈夫……」

「シユアさんは、そのまま置いて……」

階段を下りきる頃には治ったらしい。二人はお互いの背を叩き笑い合っている。

鍵は取れそうに無かったので置いてきた。なので四階下からは別の条件が来るはずだ。気を引き締めていこう。

四階下。

「え……っ」

私は戸惑い言葉に詰まる。古代文字を読み上げようとして、如何すれば良いのか。

「シユアちゃん？」

「何々？ 兄弟、読める？」

「うーん……クチツケ……イセイ……」

レフの方は少し古代文字をかじっているからか悩みながら喋っている。

「……異性と口付けか、ふーん」

ライの方が意味ありげに私を見るので、ビクツと身が跳ねる。

「あ、ゼンインだ！ そうそう、そう読むんだった」

「全員かあ……よし、レフ、ちゅーしようぜ」

「え、ライ本気？ って、うわっ」

力強く引き寄せて双子が唇に口付けをして離れる。扉は何も反応しない。

「……えっと、チルキシやがんで目を瞑って」

私がそう言うと、チルキシはしやがみ込み瞼を瞑る。私が、そっと口付けをしようとして先にライに顎を取られ私の唇に押し付けられた。

「ちょ……」

「ほら、レフも」

「ごめんね」

ふにつと優しく唇が触れて離れる。私は少し眉をひそめつつチルキシの唇に口付けをしたのだった。

五階下。 古代文字。

『イセイノチブサヲサンビヤクモメ』

「……そ、そういえば先に行った組と出会わないね！　もう帰ったのかな！」
「あ、話逸らした。レフ、読める？」

「……待つてね、うーん……イセイ……チブサ……揉む？　この数は三……百？」
「はーん？　絵柄的に女の子の、おっぱいを弄ってる気がするね」
「女の子の……おっぱいか……」

双子の視線が私に向き、パツとチルキの背に隠れる。

「いいや！　今回は異性の乳房なもの！　私が男性の乳房を揉んだって良いはずよ！」

「……そうきたか」

「確かに異性ではあるね」

双子が薄く笑ってローブを脱ごうとしている。脱がなくて良い。
「確かに出会わないね」

チルキだけが、のんびり私の最初の言葉に返答してくれた。好き。

「私、チルキの乳房を揉もうと思うの！」

「オレの？　くすぐったそー」

キユキユキと笑って私の前に胡座をして座るチルキ。ぽんぽんと膝を叩いて無言で座るよう促してくる。小さい頃はお互い祖父の膝上に座って過ごしていたものだ。チルキが大きくなる前に祖父は亡くなってしまったが懐かしい素敵な想い出だと思う。

のし……

正面、向き合ってチルキの膝上に跨がって座り硬い乳房に触る。チルキは竜人なので肌が強い。大抵、上半身の服は着ていない。

「うーん、揉まれるなら楽しいけど」

「男の揉まれを見ても楽しくないね」

しかし三百回の揉みは大変ではないだろうか。先に行った組もしたのだろうか。

「なんて地味な作業なんだ……それにしても竜人の筋肉すごいね」

「チルキが片手間に家の解体作業で小銭稼ぐの見かけるけど手車いらずだもんね」

「そういえば土砂崩れの巨大岩自力で運んだんだっけ？」

「ちよつと、よく分からないよね」

三百回揉む。チルキの胸筋を三百回揉み終わる頃には手が疲労感を感じ、しかし見立ては合っていたようで扉が開く。

「階段じゃなく奥に行く感じかー」

「この場合、おっぱい関連また来そうだね」

「楽しみ」

「楽しみ」

「こいつら……」

双子に少し苛つきながらもチルキに御礼を言つて一緒に進む。

「お、きたきたレフ〜！」

「よし！ 頑張るぞ！」

私が読めるけど発言を洩るから最初からレフが読もうと目を凝らした。ひしひしと感ずるスケベ心。もう帰りたいな。

「あく絵柄的に乳首吸ってないこれ」

「要約すると異性のバブちゃん還りを満足させろってさ」

「……」

私も洩々、読んでみれば虚言ではなく事実書いてある。

『アカンボウニナツタイセイノココロヲイヤセ』

「全員とか書いてない？」

「残念ながら……くっ、チルキばっかだ……」

「でも、どっちが乳首吸うの？」

「チルキが横になって吸うとシユアさんの膝壊れそう……」

「俺らのは何時でも出せるし吸うのも、やぶさかではないよ」

「……うう、チ、チルキ……チルキの、お、おっぱい……吸わせて……」

「ん」

チルキは頷いて先程と同じ胡座になって今度は私を横に抱き胸筋を見せ付けてくる。

ごくり……

私は意を決して、チルキの乳首を口に含んだ。

ちゅう……ちゅう……ちゅうちゅう……

瞼を瞑って赤ん坊の気持ちになつて、ちゅうちゅう、ちゅうちゅう。

「うわゝ片方の乳首完立ちじゃん……」

「左右で形が違うの可哀想……」

「……っ」

私は瞼を開けてチルキの乳首を確認する。確認すれば片乳首だけ三倍ぐらいに膨れて充血していた。

「……こ、こっちも吸うね」

「……んっ」

片方の乳首も吸い。見事、どちらも充血させたけど扉が開かない。双子は真剣な顔をして呟く。

「これは……俺らがシユアさんの乳首を吸う流れでは？」

「出番か……」

真面目な顔してスケベ心を出さないでほしいと思う。けれど、本当に私の乳首を吸わせなければいけないのか。古代文字の文を、もう一度考える。

『アカンボウニナツタイセイノココロライヤセ』

——……私の心が荒れているから……？

赤ちゃんに、赤ちゃんになりきり全力で己の心を癒されなければ扉は開かないのではないだろうか。

「……お、おぎや……ばぶー……」

「うわっ、シユアさんの気が狂った！」

「違うよ兄弟、シユアさんは赤ん坊に成りきりバブちゃんとして全力で癒されようとしているんだ」

「は……！ 俺の浅はかな考えとは違い、そんな真面目に……！ ごめんよ、

シユアさん……」

二人は真剣そうな雰囲気喋っているが声が笑っている。護兵の能力は凄いが、こういう時、本当、腹立つな。

ちゅうちゅう……ちゅうちゅう……ちゅう……ちゅう……♡
ちゅうちゅう♡ ちゅうちゅう♡ ちゅうちゅう♡

ゴゴゴゴゴゴ……

「あ、開いた」

思わず熱中してしまった。瞼を開ければ鱗が無い部分の肌が、ほんのり火照っているチルキの姿。

ごり……っ

「？」

体制を整えようとしてお尻に感じた何やら硬い感触。見てみれば、チルキの下半身の前側が大きく脹らんでいる。

「えっ、もしかして私が潰して腫らしちゃった？」

なでり……

「だ、大丈夫っ♡」

「でも……」

なでり……なでり……

「時間が経てば治るから……っ♡」

チルキに下ろされ。それでも心配で私はしゃがみ込み撫でながら言う。

「私の回復薬を……」

「シユアさん……俺達の、ここを見て」

「え？」

双子がマントとローブを捲りズボンを見せてきた。

「ね、同じ感じで膨らんでるでしょ」

「膨らんで……本当だ……まさか攻撃されてるの!？」

慌てて周りを見渡す。ただの迷宮の空間で謎解きをするだけと思い油断していた。透明系の敵だろうか。

「自分が吸われたらと思うだけでもくるもんだね……」

「チルキは直吸いだから完勃起でしょ？　はあ……凄い迷宮だよ……」

「い、痛くないの……？」

「……俺らも撫で撫でしてくれたら」

「おっと、チルキ、違う、違う！ 冗談だから！」

双子が青い顔になり捲つていたローブを治すと、ササツと階段の方に行ってしまう。攻撃されているのに、なんて悠長な。

「チルキ……やっぱり回復薬を……」

「だ、大丈夫っ♡ 大丈夫だからっ♡」

なでなで……なでなで……ビクンッ！ ビクンッ！

「わっ！ え？」

何か脹らみが凄く跳ねた。すると少しして柔らかくなっていく。

「腫れが引いてく……？」

「う、うん……♡ ありがとう……♡」

とくに何もしていかないけれど撫でていたら治ったらしい。チルキに感謝で抱きしめられて額に口付けをされたのだった。

迷宮の問いが出される部屋。その空間の一つで男三人、女一人が荒く息を吐き出している。

「サマンサっ♡ サマンサ……っ♡ あっ♡ 上げっ♡」

きゅぽっ♡ きゅぽっ♡ きゅぽっ♡

「んっ♡ もっ、やだ……♡ か、帰ろうよ……っ♡」

先に迷宮に潜った四人組の護兵。サマンサという女護兵と共に仲の良い三人の男護兵。彼らは迷宮から出された道具を使い謎解きに挑戦していた。

「帰還の巻物は高い。宝の収穫が潤うまでは進むべきだろう」

くちゅっ♡ ぬぽぬぽ♡

迷宮から出された魔法道具の中に粘度の高い回復薬を入れて指で中を混ぜていた男は指を抜き。ズボンの下から勃起した肉棒を出すと魔法道具の穴に合わせる。

「……はあ♡ じゃあ俺も、そろそろ入れるね♡」

「ひぐっ！ お、お尻がっ♡」

彼らの前に出されたのは迷宮の不思議魔法道具。彼らは全員、ある程度、古

代文字が読めるので読み解き。

ぬぶぶぶ……♡

「っは♡ やっぱ肛門の方なんだ……♡ 凄い絞まる……っ♡」
「うっ♡ ううっ♡ は、早く出してえ……♡」

きゅぽっ♡ きゅぽっ♡ きゅぽっ♡ ぬぶぶぶ♡ ずろっ♡ ぬぶぶぶ♡
ずろっ♡

二つの道具の穴に己の肉棒を入れて自慰をする男二人。その自慰行為に異様に反応するサマンサ。腰を抜かしているサマンサを後ろから支える男は服の下から勃起したモノをさり気なく押しつけ見守っている。

「だめえ♡ もあつ♡ き、きちやうつ♡」

「そういう時はいくつて言わなきや私達に伝わらないよ、サマンサ」

「はひゅ♡ イくつ♡ イくつ♡ イッうううつ♡」

ガクン、ガクンつと激しく痙攣するサマンサ。衣服の下半身はドロドロだ。もう何度、浄化した事か。サマンサはいきやすい身体をしているらしい。

コリ……コリコリ♡

「やあん♡ ちくびい♡ あつ♡ あつ♡ イってるのにい♡」

痙攣するサマンサの上半身に手を入れ込んで直接、乳房を触り乳首を弄る背後の男。目の前の自慰二人は、そんなサマンサを見つめながら道具の穴に肉棒を出し入れするのを止めない。

「ほらっ♡ サマンサっ♡ 出すよ！ 中に出すから見るんだっ♡」

「俺も出すからね♡ あっ♡ くっ♡」

きゅぽっ♡ きゅぽっ♡ ぽこんっ♡ きゅぷっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡
ぱんっ♡

「あっ♡ あっ♡ あゝ♡ あううう♡♡♡」

目の前で道具に射精する二人。その射精と共にサマンサは大きく身体を仰け
反り潮を噴き涎と涙を垂らしながら高みに震える。

「よし、よし♡ イけて偉いなサマンサ♡」

男達に優しく撫でられ肉棒の先で口付けをされながらサマンサはうつとりと
微笑んだのだった。

《エロ迷宮をクリアするまで帰れません!》

発行日 2023 年 10 月 10 日

著者 いば神円(しんえん)
<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
